
蠅、捨てたら戻ってくる人形の話

シャロク坊主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蠅、捨てたら戻ってくる人形の話

【Nコード】

N21360

【作者名】

シャロク坊主

【あらすじ】

蠅を許すか殺すかどうかという益体もないお話。

（前書き）

昔の作品の供養です。

読んでる間も読んだ後も不快感しかないと思うので、ご注意ください。
何かを殺したくなったりときにでも読むようお奨めします。

深夜のこと。他に開いている店もなかったので二人して大学近くのラーメン屋に行ったら、修一の焦がしネギラーメンに大きな蠅が浮かんでいた。

蠅はすっかり干からびて、茶色の巨大な耳くそみたいに見えた。そのくせ目の赤い色素だけはくつきりと残っている。焦がしたネギの下のにごった褐色のスープには、蠅から染み出した何かが混ざっている。

気色悪い。今すぐ取り替えてもらえよ。それでタダにしてもらえ。はしゃごうとしたが、言葉が口についてでなかった。蠅のせいでさつきまで美味しく食べていたラーメンが排泄物みたいに見えてきた。胸の辺りが気持ち悪い。アツクルシイ。麺の切れ端が食道をそれて右肺に流れ込んできている。そんな気がする。

「ああ いいんだよ、これ」何がいいのか知らないが、修一は蠅を箸でつかんでテーブルの上に置いた。ティッシュで箸をぬぐおうともせず、そのままラーメンをすすり始めた。

俺のゆがんでいるだろう顔を見て、そのまま麺をもぐもぐとやった。

「べつに店が悪いんじゃないなくて、俺のせいだから」もぐもぐしたまま喋りやがったせいで、開いた口の中を一瞬見ってしまう。歯にまとわりついた生白い麺が糸ミミズのように見えた。

あんまり不愉快だったせいで、修一の奇矯なセリフに突っ込むタイミングを逃した。というかそもそも口を利きたくなかった。こいつともう一回むき合うのが我慢できない。口を開ける瞬間のにちゃりや、麺をすするズルズルが我慢できない。

俺は「悪い帰るわ」とだけ言って、外へ出た。券売機というものがありがたかった。いちいち店員と話さなくても済むからだ。

右肺が熱い。

アパートに戻ってもまだ気持ち悪さが残っていた。吐こうと思つてカビと汚れだらけのトイレに入っても、そうそううまく吐けるもんじゃない。口の中に人差し指を突っ込むという行為がどうもうまくできない。仕方がないから冷蔵庫に眠っていたありったけの缶ビールと缶チューハイを全部飲んでしまうことにした。パソコンつけて、よく知らない白人が喚いている映画を見た。気分が悪くなつてすぐにブラウザを閉じる。　　気をとりなおして、今度はよく知らない美女が機嫌よく踊っているのを眺める。また気分が悪くなつてブラウザを閉じる。そんなことを繰り返して、結局は芸人が関西弁でドツキ合っている動画に落ち着いた。やっぱり漫才はいい。地元ノリを思い出す。どんなしょうもない下品なボケにも突っ込みは必要だった。誰かが吹いた牛乳はちゃんとぞうきんで拭かないといけない。頭おかしい奴がいたら、はりせんで叩かないといけない。目の前で蠅入りラーメンなんか食われた日には、殴るか殺すか、するしかない。

飲み続けて、ほとんど意識を失うようにして寝た。東向きの窓、差し込んできた光が眩しくて目が覚めた。カーテンを閉め忘れた自分に腹が立つ。まぶたを開けたらめやにが食い込んできて痛い。喉が乾いて仕方がない。あれだけ飲んだのになんで喉が乾くのか不思議に思っていたら、エアコンのブウンと大げさな排気音に気づいた。つけっぱなしで寝ていたのだ。冷蔵庫をあけたが酒以外には何もなく、仕方ないから冷たい缶ビールでえづくしかなかった。尿意と腹の痛みが襲ってきて、缶ビールを持ったままトイレに直行した。今日ほどウオシュレットがついていないことを腹立たしく思ったことはない。

さらに忌々しいことに、必修の制限が入っている。考えないことにしてシャワーを浴びる。つけっぱなしのエアコンのせいで、風呂上りの身体に冷たさすら感じる。冷蔵庫の上に置きっぱなしの腕時計を見ると七時半だった。七時半……。エアコンを切って、適当なシャツとパーカーとジーパンに着替えて、携帯と財布と鍵、それに

カバンを持って家を出る。一週間分のノートや読みかけの本が入ったカバンは重い。ドアを閉めた矢先に小さくゲップが出た。ネギの臭いがする。俺はまた部屋に戻って念入りに歯を磨いてデンタルフロスを使ってモンダミンでお口くちゅくちゅしてそれから仕上げ磨きをした。

音楽を聴くことを思い出したが、聴きたい曲はなかった。

必修の制限は辞書の歴史についてだった。昔からいろんな人間がずいぶんものを書いてきたし、仕方のないことなのかもしれないが、つまらない。それこそ蠅がたかっているような授業だった。内容はまったく頭に入らず、入れる気もなく、授業の終わりには出席力ードだけが教卓の上にたまっていく。

修一は教室の扉の外で俺を待っていた。

「昨日はどうした？」

「お前な、蠅の入ったラーメンなんか食うな」

修一は何も言わずに頬をぼりぼりと掻いた。無精らしくよく見ると産毛が目立つが、それほど不潔な奴じゃない。ちゃんと服は毎日変わっているし、髪も脂っこくない。ごく一般的な清潔観念を持っている、はずだ。

「べつにいいだろ蠅ぐらい。どんだけ繊細なんだ？」と修一はあざ笑った。

「気持ち悪くないのか？」なんてお前、蠅なんて当然みたいな顔して流せるんだ？

「いや、普通だろ。ってかお前のラーメンに入ってたわけじゃねーだろ」

「蠅そのものより、当然みたいな顔して蠅入りラーメン食ってるお前が気持ち悪かった」

「お前なに、都会っ子？」

「普通の衛星都市で育った普通の大学生だ。出身なんかどうでもいいだろボケが。何処の庭先にだってカMEMシぐらいいいんだよ」

「あつそ……。俺には蠅ぐらいでそんなに怒れるお前が信じられない」

お前が怒らないからだろ。さっきも言っただろうが。蠅じゃなくて、お前に怒ってるんだ。

「もういい」と俺は言った。「何処まで行っても平行線だ。もう話かけないでくれよ」修一と目を切って、早足で階段を下りる。いつだったか、宗教に走った同級生が言っていた。嫌いなものからは遠ざかれない。

「待てよ」階段を下りたところで振り向くと、修一が目を細めて俺をにらんでいた。

「お前に見せたいものがある」

「俺には見たいものなんてない」

「いいから見に来い。お前が蠅を嫌うんなら来い。俺とお前は教室で毎週会わないといけないんだ」

……正論だった。二コマ授業が同じなこいつとは、週につき最低百八十分は同じ空気を吸わないといけない。蠅交じりの小汚い空気を。

「ええよ」

修一は行き先を言わずに俺の前を歩き出した。俺もいまさら聞かなかった。何処へだろうと、ええよと言ったからには行く。よっぽど変な場所じゃなければ。

そんなことより気になるのは立ち位置だった。さっき空気を連想したせい、修一の吐き出す空気が後ろに流れてくるのが気になつて仕方がない。なるだけ斜め後ろからついていくか、間に一人入れるしかないだろう。大学の周りにはいくらでも人がいるので生け贄には困らなかつたが、文学部のキャンパスを離れて大通りをしばらく歩き、外れた辺りで生け贄の女子大生たちはついにいなくなつてしまった。いなくなつてから、生け贄が無意味だったことに気がついて自分の頭の悪さに辟易した。生け贄だって息を吸う。そして残念ながら息を吐く。

「ついたぞ」と修一が言った。古びたマンションの前だった。白い壁は全体的にくすんでいる。

「お前の部屋か？」

「すぐ終わるよ」

階段を上って三階の六号室。修一がドアを開けると、凄惨な光景が広がっていた。もっとも俺の部屋といい勝負な散らかり具合だったが。玄関のすぐそこから、ダンボールが二つ重ねて置いてある。中には雑多な本が乱雑に積み重ねられている。手にとって見ると古本屋で百円ぐらいで売っている本ばかりだった。実質的な価値はほぼゼロだ。

脱ぎ捨てられた冬物の服が床を覆い、足の踏み場はなかった。こたつを出しっぱなしにしている俺に言えることはない。六畳ほどのワンルーム。折りたたみ式のテーブルにアルミの安っぽい椅子。エアコンとパソコン以外に目立つ家具はなかった。テレビもラジオも冷蔵庫も炊飯器もない。

「まあ座れよ」と言われても、物を踏みしめ椅子のところまでたどり着くのがめんどろだったので、しきっぱなしのふとんの上に座った。修一は椅子に座って、テーブルの下からガラスのビンを取り出した。決して小さくはない。梅干なら一週間分は持つ。けれどそのビンに入っていたのは梅干ではなく蠅だった。みっちり詰まっていた。修一がそれをこっちに投げつけてきたのでつい受け取ってしまった。ガラスの中の蠅たちはみな干からびて燻製みたいになっていた。茶色と黒でできていて、ポロポロで、目元だけがほんのりと赤い。マクドのチキンみたいにしゅかしゅか振ってしまいたくなる。蠅じゃなくて干からびただだの何かなら、こんなに気持ち悪くはなるまいに。

「……それ、全部俺の中から出てきたんだ」俺がビンを手の中から放り出すと修一は言った。

「出てきたって、物理的にって意味か？」

「そう」

「お前が……その、見出したとか、そういうふざけた意味じゃなくて？」

「同じこと言わせるな」

……何を言ってるんだこいつ。

頭、大丈夫か？

「まあ聞けよ。最初の一匹は枕にへばりついてたんだ」と修一は言った。「俺は夏でも窓は開けないんだ。網戸を通り抜けてくる虫がうっとおしいから。いつもエアコンだけで済ませる。電気代は一万とかいく」

「電気代はどうでもいい。……窓以外にも進入経路はあるだろ」

「ドア下に隙間はない」と修一は言った。俺は振り返って確認する。確かに、閉じ切ったドアには隙間はない。ノミかダニぐらいなら間を這い出ることもできるだろうが、蠅には無理だ。

「ありていに言うなら密閉してるんだよ、この部屋」

「いやいやそれはないだろ。お前がドアを開けた瞬間に蠅が入ってるんだろ」

「それだけの数の蠅が？」

俺はまたビンを見てしまう。何匹いるだろう。数えたくなどないが、十匹や二十匹では済まない。ドアを開けるたびに入ってくるとしても、何ヶ月もかかるに違いない。

演繹的にはともかく、帰納的にはありえない。

「生ごみは？」

「もちろん、最初の一匹が出てきた時点で徹底的に処分した。今も決して俺は、家では飯を食わないようにしている」部屋を見回す。

確かに、転がっているのは服や本の残骸ばかりで、生ものはまったくない。ビールの空き缶ですら、ない。

「風呂にもちゃんと入ってる。押入れに死体があるわけでもない。でも、蠅がいる。生きてる姿は見たことない。みんな干からびてる」

「……排水溝は？」ないとはい思うが一応訊いてみた。

「見てみるよ」と言われるままにふとんをくしゃりと踏み潰して確

認しに行く。白カビで薄汚れた流しはガムテープで封じられている。トイレ並びにバスルームの戸を開けると中は滑稽なほど綺麗に掃除されている。原因はここでもなさそうだ。

「……お前、やっぱり蠅気にしてるんやんけ」

「気にしてたら生きていけないだろ」と修一は言った。

ふとんの端っこで転がっている蠅のビンに威圧感を感じる。無視したくて仕方がないのに、横目でちらちら見てしまう。気持ち悪い。もうこんなところは出るべきだろうか。それはまだだ。俺はまだこいつを殴ってもいないし、殺してもいない。

とにかく話を聞こう。それからだ。

「最初の一匹は枕元で干からびてた」と修一は繰り返した。「もちろん気持ち悪かったからティッシュでくるんですぐに捨てた。

今思い出してもでかかったよ。冗談じゃなく、小さなゴキブリぐらいのサイズはあった。そんな顔するなよ。信じてもらえとは思ってないから、まあ聞いてくれ。その日から、気がつくと部屋の中に干からびた蠅の死体が転がってる。テレビの画面に張り付いてたし、冷蔵庫の中にへばりついてた。炊飯器で炊いた米の中からでてきたこともある。蒸されてて、そいつはけっこう色がよかつた。おじぎみみたいな手をして、米の中で死んでた」うっかり想像してしまった。鮮やかな赤い目、毛の生えた前足。

「気色悪い。……それで、お前の部屋には家具が少ないのか」

「ほんとはこのパソコンも捨てたいけど、これないと生きてけないしな。キーボードの間に何匹挟まってたか分からない。キーボードだけじゃない。本を読み返すと必ずと言っていいほど一匹入ってた。おかげで何冊捨てたか分からない」

「見た感じ大量に残ってるけど」

「それはまだ読んでない本だから」

あほか。

何年かけて読み切る気なんだ？

「それで、その嫌な蠅をどうしてお前はビンに詰めてるんだよ」

「戻ってきてるのかもと思った」

「蠅がか？」

修一は大まじめで頷いた。

「捨てたら戻ってくる人形の話ってあるだろ。　なんかな、どれも同じ蠅に見えて仕方がなかったんだよ。だから試しにビンの中に閉じ込めてみた。絶対に出不られないように念入りに蓋を閉めて」

捨てたら戻ってくる人形の話。戻ってくる理由はなんだ？　未練、罪悪感、思い入れの強さから生じる残留思念。夢の中で昔の知り合いが暴れてるようなもの、一種の、象徴。

「そうじゃなかった、んだな」夢でも思念でも象徴でもない、蠅はビンを抜け出るなんて真似はしなかったのだ。それは見れば分かる。「どんどん増えた」と修一は言った。

「どれだけ閉じ込めても、無駄だった。しまいにはビン一杯になるまでたまった。一杯になったときからあほらしくなってやめたけど、捨てきれない」

「戻ってこないのは分かったんだろ。捨てる」

「そのうちな」と修一は言った。捨てる気がないのは明らかだった。

「で、蠅がお前の体から出てくるってのが結論か？」俺はまた蠅のビンを意識してしまう。こんなに気持ち悪いものはお化け屋敷にだってそうそうないだろう。なんとというか、ひと粒ひと粒が、でかい。他に考えられない」と修一は言った。

「蠅が干からびてたのは全部俺がさわった場所なんだ。俺が初めて読む本とか、口も付けてない食べ物には絶対にいないんだ」

「　冷蔵庫はともかく、テレビになんかそうそうさわらんやろ」「リモコンなくして、直接チャンネル切り換えるしかなかったんだよ」「身に覚えのある話だった。これだけ散らかっていはなおさらよく分かる。」

「炊飯器は　米を研いだときってことか？」

「それ以外に考えられない。いくらなんでも最初から入ってたんな

ら、研いでるうちに気づく」

「思いこみ過ぎ。その口ぶりだと、自分の体から出てくるところを直接見たわけじゃないんだろ」

「……腕をな、搔いてたんだよ、かゆかったから」と修一は半そでから突き出た生白い腕を俺によく見えるように伸ばした。

「突然だ、くによりって感触がして、見ると爪の間に蠅がはさまってた。干からびた蠅が」

それきり修一は黙り込んでしまった。

言うべきことは全部、言ってしまったらしい。

「お前の言うことを真に受けることはできないな」

「信じてもらえとは思ってない」

「じゃあなんで俺に話した？」

「好き嫌いの問題じゃないってこと」

「好き嫌いに帰結しない問題なんて何処にあるんだ？」

「選びようがないんだよ。クソが。俺だって蠅入りのラーメンなんか食いたくて食ってるんじゃないよ」怒りというより疲れたような声だった。「でもしようがないだろ。熱いからって噛み切っちゃまったんだから」

「……一度さわったものに、必ず蠅がつくのか？」

「んなわけない。そこまでじゃない。……でも、だんだん増えてきてる。食いものに浮かぶようになったのは最近だ」修一は顔を歪めてそう言った。

「俺の、知らないところで、何かが腐ってる。俺の中の何かが」

話は分かった。現象も見た。でも原因は分からない。

しかし、人の体が蠅になるなんてことは、ありえない。唯一あり得るとすれば「人」を「蠅」と呼び替えることぐらいだろうが、そんなこと誰も認めない。人は人だ。生まれる前から遺伝子によってそう規定されているはずだ。

だから、体から蠅が出てくるなんて言う奴は、殴るか殺すか、するしかない。

「エアコンの排気口を調べたか」

「フィルターがかかっている。ありえない」

「調べてないんだな。ならそれでいい。蠅はエアコンの排気口から入ってきた。そういうことにしとけ」

「気休めはやめろ。何の解決にもならん」

「いや、なる。排気口なんてただの一例だ。この部屋は真空パックじゃない。お前が窒息して死んでないんだから、空気はどっから入ってきてる。蠅はそこから入ってくる。それ以外に物理的にありえない。あるいは、この部屋の、お前が知らない何処かで蠅が繁殖してるんだ。なにも、お前の体から出てきたわけじゃない」言いながらズれていることに気がつく。出自の問題じゃない。

「じゃあなんでラーメンに入ってるんだよ」と修一は怒鳴った。「この部屋だけで済むなら俺だってそう考えるさ。その方が意味分かんること認めるより楽だしな。でもなんで俺の行く先々の店で蠅が死んでるんだ？ 干からびて、天井からひらひら落ちてきて、俺がどんぶりから顔をあげた瞬間にスープに落ちるのか？ そんなことあるわけないだろ。お前、なま言っていると殺すぞ」

「お前が死ぬ」と俺は言った。

「死にてえよ」と修一は言った。

「お前がいなくなった後のラーメン屋でな、ひどいことに気がついた。お前にも蠅が見えたってことは、そのビンの中の蠅どもが見えてるってことは、俺の幻じゃないってことだ。俺だけに見える特別な何かじゃないんだ。俺の頭が狂ってるんじゃないって、物理的に蠅がこの世に存在してる。俺は、これからも誰かとラーメン食うたびに、蠅を取り分けなきゃいけないんだ」

いや、待てよ。

そういう問題じゃない。

俺は、俺の頭が狂ってないこと、証明できないぞ？

修一、お前には想像力が足りない。お前の立場から俺の実存が証明できるわけないだろ。俺がお前の実存を証明できないのと同じこ

とだ。

そうだ、蠅が実際にいるのかいないのかじゃなくて。

そういう問題じゃなくて。

「なあ、蠅なんて大したことないだろ」と修一は咎める。

「ドキユメンタリーとかでさ、見るだろ。蠅だらけの国で暮らして外国の連中。牛が尻尾でひっきりなしに蠅叩いてる横で、あいつら普通の顔して生きてる。いちいちこんなもんに過剰反応してる日本人の方が間違ってる。そうだよな」

実際に聞いたのか？ いちいち蠅を叩き潰してたらきりが無いという、ただそれだけの理由に思える。

「お前の方が間違ってる。蠅が俺のラーメンに入ってたらなんだ？ それがどうした。なんでそんなことぐらいで俺との関係を切るんだよ」修一は俺を見ないでそう言った。「俺はこれからも、こんな理不尽なことで人に嫌われ続けるのか？」

「お前が間違ってる」と俺は言った。やっと口に出して、言葉にできそうだった。

「人間は蠅が嫌いなんだよ。高田馬場で百人に聞いたたら百人とも嫌いっていうだろう。少なくとも俺は嫌いだ。汚くてグロい。ただそれだけの理由だ。だから汚くてグロいものを受け入れて、あまつさえ他人にそれを強いようとしてるお前が許せない。蠅の出自の問題じゃない。お前は蠅に対して怒ればいいんだ。部屋中に殺虫剤捲いて可能性をぶっ殺せばいい。ラーメンのスープに入ってたなら、せめて嫌な顔して取り替えてもらうくらいはしろ。ごちゃごちゃ言ってる俺のせいにしてりや楽だよな。蠅の汚さやグロさが帳消しになるわけでもないのに」俺は立ち上がった。これ以上、話し合いの余地はない。

「俺は、汚さやグロさをなあなあで受け入れてるお前が、嫌いなんだ」

散らかっているものを踏みしめて玄関に行く。靴を履く。

「待てよ、なあ見てみるよ」と修一は言った。

振り返ると、修一は右手を突き出して、左手でその甲を掻きまわした。

その爪から蠅が落ちる。一匹。二匹。がりがり皮膚が引きちぎられていく。音もなく、蠅が落ちる。三匹、四匹。しんなりと、白いトレーナーの上に黒い雨が降り積もっていく。

「蠅も、俺の一部なんだよ」修一は唇を噛み破って、血を吐きながらそう言った。蠅が、口の中から一匹、飛び出てくる。無論干からびて死んでいる。

「俺は自分を嫌い続けて生きていけない。お前みたいに、自分も他人も軽蔑しながら生きていけない。お前は、絶対に、間違ってる。絶対に」

「正誤の問題じゃない」俺はドアノブを捻った。

「好き嫌いの問題だ」

翌週も修一と授業で出会った。チラリと見た姿は痩せているように思えた。その次の週もまた授業で出会った。今度ははっきりと痩せていた。修一は、少しずつ、干からびた蠅になっている。あいつの座った席にはきつと蠅の死骸が転がっているのだろう。

誰もそれを気につけない。ぱつと払いのけて終い。俺たちは互いに互いを見ていない。目的があるから集まっているだけのこと、目的に必要なだから話しているだけのこと。

修一は干からびていく。嫌いだ。蠅を自分の一部と認めるほど世界に対して臆病な人間に、同情の余地はない。去るがままに去らしめればいい。あのちんけなガラスビンの中で干からびてしまえ、そう思う。

その次の週、修一は大学に来なかった。

六月になり、雨が降り出しても来なかった。

俺は自分の汚い部屋に帰るたびに、修一のことを思い出してイラついていた。いくら片づけても、数日経つと元通りの凄惨な光景に戻る。ほこりが積もり、本は重なり、空になった缶ビールが転

がる。食い散らかした弁当の残骸は、コンビ二袋の中ですよえた臭いを発している。傷ついたフローリングのせいでやる気がそがれる。座椅子でがりがり削ってしまった。カーペットがズレていることにも気がついてなかった。

一度こびりついた汚れはどれだけこすつても落ちないと、トイレ掃除で学んだ。

雨がやんだ六月のある日。授業を終えた俺は、文学部のキャンパスを離れて大通りを歩いた。連れだって歩く大学生たち。化粧と茶髪と笑い声。誰でも同じに見える。どいつもこいつも頭が浮かれている。ところが俺みたいに一人で歩いている奴は、みんな下を向いて歩いている。

信号を渡って二つめのコンビ二を右へ曲がる。路地に入って、前とは景色が違うことに気がつく。曲がるコンビ二を間違えたらしい。戻ってさらに少し、歩いた。見覚えのある看板と月極駐車場。コンビ二の前で何人かの中学生がたむろっている。自分が中学生だった頃を思い出す。「おもしろくないのに無理に喋らなくてもいいよ」というのが、あの頃の共通項だった。おもしろいか、おもしろくないかの問題。

路地に入ると、薄汚れた白いマンションが右手の奥にあった。

階段をのぼる。三〇六号室。チャイムを押しても、ノックをしても誰も出ない。

ドアノブを捻ると、回った。鍵は閉まってない。

隙間程度に開けたところで、指の力が抜ける。

やせ細っていた修一を思い出す。ひよっとしてこの部屋の中に死体があるのではないかと、想像する。ある光景が脳裡をよぎる。

それは服を着た修一の死体ではなくて、裸の蠅の死体だった。巨大な蠅が仰向けに倒れて、干からびている。目は虚ろで、血のようにくすんだ赤。拡大された複眼は蛇のうろこのようにひびわれている。長い六本の手足を赤ん坊のように広げて、手先だけを申し訳なさそうにひつつけている。ひからびたぺらぺらの腹は茶色と黒のま

だら。斑点のような模様が腹にへばりついている。羽はひしゃげて、床に放り出されたふとんや、白いトレーナーを覆う。ふとんは俺が座っていたふとんで、トレーナーには修一の体から出た小さな蠅の死体が貼りついたままだ。

落ち着け。

そんなわけがない。蠅は蠅で、人間は人間だ。

このドアを開けて、確認すれば済むことだ。

それで、殺せる。

錯綜。俺は自分を嫌い続けて生きていけない。お前みたいに、自分も他人も軽蔑しながら生きていけない。お前は、絶対に、間違ってる。絶対に。

見失う。(俺の)正誤の問題。あいつは正しくて、俺は間違っている。(目の前で)蠅は多分この中にいる。ドアを開いて可能性を殺せば分かる。いとも容易く、怪異は死ぬ。(爪の間から蠅は生まれた)。

……ドアを、開けることが、できない。

蠅が多分、この中にいる。

俺が殺されるかもしれない。

「まあ、いいか。ゆるしてやっても」

その夜、枕元に一匹の蠅が現れた。

ブウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2136o/>

蠅、捨てたら戻ってくる人形の話

2010年10月9日17時55分発行